

〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 53 49～55 (2015)〕

「キッズ・イングリッシュ」に関するアンケート結果と 聴取意見の分析と考察：実践を中心に

小 玉 容 子 キッド ダスティン
(総合文化学科)

Analysis of the Results of a Questionnaire about 'Kids' English':
Focusing on Students' Teaching Practice

Yoko KODAMA, Dustin KIDD

キーワード：子ども、英語教育、実践、アンケート
kids, English education, teaching practice, questionnaire

1. はじめに

本学総合文化学科専門科目「キッズ・イングリッシュ」(以下「キッズ」)は、幼児・児童英語教育に必要な教授法の基礎を学び、教材研究や教材作成、実践を行う授業である。受講生は子供たちに教える方法や内容を学びながら、必要とされる英語力の向上——英語の発音など音声面全般に関する能力の向上、表現力・コミュニケーション力の向上——を目指す。実践は、本学図書館の分館である子供向け図書館「おはなしレストランライブラリー」(以下「おはレス」)で 幼児・児童向けの英語絵本の読み聞かせを中心とした'English Story Time' (以下 'EST')を実施し、実践を通して上述した能力のさらなる向上を目指している。この実践活動では、幼児・児童だけでなく保護者との交流もあり、成人とのコミュニケーション力も求められる。実践のための教材研究(教材選択、教材作成)と、それらの教材を用いての有効な提示方法の習得(プレゼンに関する工夫、発話などの練習)が学生に課された準備段階での課

題である。

「キッズ」は、平成14年度に卒業研究での取り組みとしてスタートし、平成19年度にカリキュラムに導入された。平成23年度から「おはレス」での実践を行っている。平成26年度の「キッズ」受講生は33名で、小玉、キッドの2名で担当した。今年度の実践は、毎週日曜日2回、1回目を10時30分から20分間、2回目を11時40分から20分間とし、6月第3日曜日から10月第3日曜日まで、20回実施した(夏休み中の平日実施を含む)¹⁾。学生3名のチームを基本とし、各チームが最低2回の実践を行った。その他、8月27日(水)には「おはレス」に来館した乃木小学校児童クラブ(児童58名、指導員6名)を対象に'EST'を実施し、10月11日(土)、12日(日)の本学学園祭では、全受講生が2つのグループに分かれ、'EST'特別企画に取り組んだ。

「おはレス」での実践日のうち、7月27日(日)、8月2日(土)、3日(日)、7日(木)に計7回のアンケートを実施し、保護者に回答を依頼した。

また、本学FD活動の一環として授業公開を実施し、学園祭での実践と「おはレス」での実践最終回に向けた練習については、松江市立乃木小学校の外国語活動担当者に参観を依頼し、その後意見交換を行った。本稿では、保護者向けアンケート結果と小学校の外国語活動担当者から聴取した意見、および学生の実践レポートなどを整理、分析し、「キッズ」での教材研究および実践授業のあり方、今後の展開の方向性などを探る。なお、アンケート実施に際しては、結果を教材研究、授業改善に利用する旨を伝えている。

2. おはなしレストランライブラリーでの実践に関するアンケートの結果分析および考察

アンケート項目は、1) 幼児、児童の年齢 2) 'English Story Time'への参加回数 3) お気に入りメニュー 4) 学生のプレゼン全般（姿勢、声の大きさ等含む）、メニューに関してなどの感想、意見である。回答者数は65人で、実施日別回答者数の内訳は以下の通りである。

7月 27日 ①	7月 27日 ②	8月 2日 ①	8月 2日 ②	8月 3日 ①	8月 3日 ②	8月 7日
10人	10人	7人	5人	9人	14人	10人

1) 年齢別参加者人数（総数97人）*

0/1 才	2 才	3 才	4 才	5 才	6 才	7 才	8 才	9 才	不 明
17 人	14 人	11 人	22 人	8 人	8 人	8 人	3 人	3 人	3 人

参加者は日頃から「おはレス」を利用している人たちが中心であるため、年齢層は幼児から小学生までと幅広いが、中でも特に4才児が多く、兄弟姉妹での利用のため、0～2才児も同様に多い結果となった。（*数字はアンケート集計結果であり、途中参加の人数も含むため、注1で示した参加人数とは異なっている。）

2) 参加回数（65人）

初 回	2回目	3回目	4回目	5回 以上	不 明
32人	15人	4人	3人	8人	3人

初めての参加者が多かったが、2回以上の参加者も30人にのぼった。アンケート実施第一回目の7月27日は平成26年度の7回目（日数でのカウント）だったが、5回以上の参加者は8人で、「何回も来ています、毎週来ています」などの回答内容だった。一日2回参加してくれる家族も時にはいるように、「おはレス」での実践も4年目を迎え'EST'が定着してきていること、英語での読み聞かせ活動への関心が高まっていることなどの結果と考えられる。小学校での外国語活動の拡大や外国語の教科化が議論される中で、子供たちの英語習得に向ける保護者の関心の高まりを感じさせられる結果でもある。

3) お気に入りメニュー²⁾

毎回少しずつ異なるメニューで提供している。基本的に、歌2タイトル、絵本または紙芝居2タイトルの構成である。特に高い人気の絵本、紙芝居、または歌が明らかになるような結果は無かった。傾向としては、初回の参加者や低い年齢層では、体（の一部）を動かし、参加できる歌、例えば 'Rock, Paper, Scissors' や 'Head, Shoulders, Knees and Toes'（以下、HSKT）などの人気度が高かった。

「歌や手遊びが好きなので、知っている曲で、歌があって楽しめました」、「1回目から、HSKTがとっても気に入って、家でも歌っています」、「英語がまだ分からない子供ですが、歌は絵などもあって楽しそうに家に帰ってからも歌っています」などの感想にもあるように、家に帰ってからも楽しんでもらえるメニューが歌であることが分かる。また、保護者も一緒に歌えるように、「歌詞があったらよかった」との要望もあり、過去に行なっていた「歌詞」その他の資料配布も、今後できる限り有効な形で実施していきたい。新しい曲を取り入れる一方で、親しまれているメロディーの曲も繰り返しメニューに入れ、'EST'をきっかけに、日常生活の中で英語を楽

しんでもらえることを期待する。

絵本または紙芝居に関しては、「絵本を理解するのは少し難しかったようです。でも楽しめたようです」、「英語なので物語のストーリーは分からないと思うのですが、真剣に見てくれたので、英語の読み聞かせにも興味があるのだと分かってよかったです」などのコメントに代表されるように、英語での読み聞かせの場合は、英語の意味を理解して内容を理解し、内容を基準に気に入ったかどうかを判断することは難しい。しかし、楽しんでもらうことは可能である。手作りの教材である紙芝居で、アンケート期間中に読んだタイトルは‘Momotaro’、‘Three Little Pigs’、‘Mouse’s Wedding’だったが、絵も含め親近感が持てると好評だった。実践時の印象として、例えば、‘Three Little Pigs’ではオオカミ役がおそろしいオオカミを上手に演じると集中して聞いてもらえ、‘Momotaro’ではお供の動物たちのそれぞれの特徴を表現し、鬼を勇敢に退治することで喜んでもらえたようだ。メニューの好不評はプレゼンテーションの仕方に大きく左右されるという点に注意し、練習に取り組んでいくことが大切になる。

「紙芝居の『ももたろう』は、よく知っていて、子供が良く聞いていました」、「学生さんはよくセリフを覚えていましたね。紙芝居の絵も上手でした」、「紙芝居は学生さんがとても楽しそうに読んでいて、こちらも楽しめました。絵本は、いつも読んでいたのでストーリーが分かり、私自身が英語の勉強になりました」、「初めて参加させていただきましたが、内容が大変充実していてとても楽しませていただきました」などの感想から、メニューとしては、ストーリー教材も楽しんでもらえたようだ。一方、「幼児向けなのでもっとはっきりと声を出したり気持ちを込めるとより伝わりやすいと思う。自分も楽しんで、自信を持って上手でした。オオカミ役の人の英語表現とても良かったです」、「紙芝居はもっとドラマチックにお話して下さると、効果があるのではと思いました」などのコメントもあり、全体のレベルを上げていくことが求められている。子供向けの絵本や紙芝居では、繰り返し表現がよく使われる。英語学習の観点から、英語を聞いて記憶していくこ

とにつながる有効な教材でもあるので、読みを一層工夫することで英語表現を定着させる効果も上げていきたい。

4) 感想、意見 など

(1) 英語への興味・関心を育て、英語に触れる良い機会となった点を指摘するコメントが数多くあった。

それらを、以下に紹介する。

- ・「たまたま来場したのですが、英語に触れることができ、楽しく、大満足です。ありがとうございました。絵本や手遊びで、子供も聞きやすく、楽しかったです。」
- ・「今日は後半しか参加できませんでしたが、いつも楽しみにしています。歌やダンスが好きなので、英語も一緒に楽しみながら触れ合える良い機会となっています。これからも頑張ってください。」
- ・「幼児の英語教育をしたいと思っていたので、大変良い企画だと思います。」
- ・「週1で英語教室に通っていますが、レッスン以外にも英語に触れる機会があるのはうれしいです。子供もとても楽しめたようです。」
- ・「大人でも少々難しいかなと思うことはありますが、英語に親しむには良い機会かと思います。ありがとうございました。」
- ・「途中から参加させていただきました。すべて英語で話されているので良いなと思いました。子供は分かっているような、分かっていないような？ですが、続けて来ることができたら、少しずつ英語に慣れていけるのかなと思います。」

文部科学省は平成26年10月に発表した「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」³⁾の中で、「グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である」と、英語力の向上が不可欠な点や異文化理解や異文化コミュニケーションの重要性を指摘している。特に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まった今、「2020（平成32）年を見据え、小・

中・高を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める」としている。この提言は、平成25年12月13日に公表された、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」⁴⁾を具体化するための提言である。

この提言の中で、「音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める」という、これまでと同様の小学校での外国語活動の目標が述べられている。「キッズ」の授業は、学生の英語力、表現力、コミュニケーション力などの向上が目標の一つだが、実践は地域貢献という目的も併せて持っている。「去年も参加させてもらいましたが、今年もとても楽しませて頂いています。来年も是非お願いします」というコメントもあった。幅広い年齢層の不特定の人たちが、広く参加できる機会となっており、子供たちの英語に触れる機会の提供、音声に慣れ親しんでもらい、英語でのコミュニケーション能力の素地を作る環境づくりという点で、広く地域に貢献できていると考える。

(2) 学生の発音、表現力、取り組みへの姿勢、などに関するコメントは、概ね好評だった。

- ・「話し方がゆっくりで分かりやすかったです。言葉のわからない子供でも興味が持てると思います。」
- ・「学生の方の表情がとても良かったです。また参加させていただきます。」
- ・「初めてでしたが、とっても楽しかったので、また来たくくなりました。学生たちがノリノリでやってくれていたのが、とっても良かったと思います。」
- ・「発音がきれいだなーと思いました。声も大きくわかりやすかったです。初めてだったし、小さいけど(子供が)楽しめました。頑張ってください。」
- ・「子供もですが、私も、学生さんたちの上手な英語に触れられて、毎週ぜひ参加したいと思いました。」
- ・「何度も練習しておられるのか、覚えてこちらを見ながら話しておられるので、とても良かったです。」

す。」

全体的に、学生は練習の成果を実践で出すことができ、その努力を保護者の方たちが高く評価してくれた。学生たちは「恥を捨てて」「大胆に」「大きな声で」「自分たちも楽しんで」という姿勢で実践ができるように、まず内容を完全に、できる限り正確に覚えることを最重要課題として練習を重ねた。授業担当者は指導の際、内容が如何に易しくても、英語の一語一語を大切にし、発音やアクセントなどが曖昧にならないように注意した。実際に大勢の子供たちや保護者の前で英語で話すことは、多くの学生にとって初めての体験であった。皆緊張していたが、とにかく練習を重ねる以外に緊張を克服する方法は無いことを理解していった。

学生の実践レポートは、このような学びの過程や結果を表しているものが多かった。「小さな子供たちとどのように接したらよいか分からなかった」学生たちが、「回を重ねるごとに、慣れていき、小さな子供が大好きになった」、「接し方が上手になった」と自己評価をしていた。「緊張」「恥ずかしい」という語は、ほとんどの学生のレポートに見られた。しかし、2回目の実践では、「緊張しながらも子供たちの様子や反応に目を配ることができた」り、「1回目ほど緊張しなかった」など、ここでも回を重ね、練習を重ね、少しずつ慣れていった様子が覗える。「もともと大きな声を出すことが得意ではなかった」学生が、本番では緊張のあまり「さらに小さな声になってしまった」りした。実際、アンケート回答の中にも「時々声が聞こえなかった」というコメントがあった。しかし、子供たちに如何に「楽しんで」もらうかは、学生たちが常に意識していた点だった。「つまらなそうにされると、何か他に良い方法があったのではないか」と考えていた。「子供たちにどう説明したら分かりやすく伝わるか、どう工夫したら英単語を一つでも覚えてもらえるか、担当者で何度も相談した。英単語を一つ一つ子供たちと一緒に発音するため、電子辞書で正しい発音を確認し、何度も練習した。実際子供たちの前で発音した時、子供たちは発音を真似しようとしてくれていたので、練

習して良かった。大変嬉しかった。」この感想に代表されるように、多くの学生がやりがいや達成感を感じた実践になった。

(3) 内容に関する要望も今後の参考になるものが多かった。

- ・「子供には、歌と手遊びの受けが良かったので、歌の数を増やしてもらおうと良いかもしれません。」
- ・「絵本や紙芝居の読み聞かせの間に、子供たちと一緒に言う場面を作るなどの工夫があるとbetterだと思います。」
- ・「とても楽しみました（親子ともに）。外国の文化がわかる紙芝居があっても面白いと思いました。」
- ・「前回の内容がとても良かったので続けて参加させていただきました。2歳の子供にも分かりやすい内容でした。初めて触れる英語に最適だと思います。ありがとうございました！もう少し体を動かす時間があれば尚良いかも。」

幅広い年齢層の子供たちに楽しんで英語に触れてもらうという点は、ある程度達成できたが、様々な課題も残っている。英語での絵本や紙芝居の読み聞かせの場合、読みに引き込む工夫をしたり、参加してもらったりして、分からなくても聞き続けてもらうことが必須である。歌は、絵本と絵本の間の「つなぎ、気分転換」として利用し始めたが、英語の時間では欠かせないメニューとなっている。ライブラリーという場所、20分間という時間、学生の可能性など様々な点を考慮しつつ、頂いた要望を今後の「EST」に生かしていきたい。

3. 「キッズ」の今後の展開、可能性について～松江市立乃木小学校の外国語活動担当者の意見を参考に～

上述したように、今年度は本学FD活動の一環として「キッズ」の授業公開を実施した。小学校での外国語活動が本格的に授業化される可能性が高くなっている今、「キッズ」がどのような形で児童英語教育に関わっていけるだろうか。地域の学校間で連携が進む中、お互いの状況に理解を深めることで

協働の可能性を探り、「キッズ」の授業に必要な内容、レベルなどを考えていく。

「キッズ」では過去に、乃木小学校での「朝読書の時間」に英語紙芝居を中心とした「読み聞かせ」を実践したり（平成21年度）、外国語活動の授業に参加したりした（平成22年度）。しかし、授業時間内に行われる外国語活動は担当者が年間の計画を立てて実施するため、受講生数が毎年異なり、受講生の時間割も4月になってから確定する「キッズ」は、授業計画の中に組み入れてもらうことが難しかった。「朝読書の時間」も年度当初に予定が組まれるため、受講生数が確定してからでは、予定に入れてもらうことが難しいと感じていた。しかし、今回の意見交換の中で、この「朝読書の時間」に「英語絵本の読み聞かせ」を実施させてもらうことが、最も可能性の高い形であることが分かった。

授業公開では、授業内容、授業運営、学生の実践に向けての練習姿勢などについて、小学校外国語活動担当者から意見、感想などを頂いた。授業の運営については、学生の練習に担当者が助言をする実践練習に関して、次のような感想を頂いた。「基本的なことを学習したうえで、学生が自らアイデアを出し、練習する。それに先生方がアドバイスをされ、より良い実践を作り上げていく…学生同士で意見交換し、先生の意見やアドバイスを受けて、また考える、練り直す…素晴らしいと思いました。」「先生方が細かな発音の留意点まで指導をしておられ、学生さんたちも真剣に受け止めて練習していたので、素晴らしいかったです。」実践に向けて、メニューの確認だけでなく、英語の音声面（発音、声の大きさ、読みの工夫など）を一つ一つ注意しながら完成度を上げていく現在のやり方は、時間がかかっても必要な練習になっている。どの程度の時間をかけるか、自主練習がどの程度できるかなど、今後は授業時間内と時間外の効率的な練習の組み合わせをもっと工夫していきたい。

学生の練習姿勢などに関しては、「実践は『子供たちの反応』という厳しい評価を受ける。目標ははっきりしているので、モチベーションや緊張感を維持しながら、より良いものを目指すことができると思

いました。チームで一つのものを作り上げる「プロジェクト」の体験は、きっと実社会でも役立つと思います」、「本番は発音を間違えてもいいので、子供たちをしっかりと見ながら活動をされると子供たちも喜ぶと思います。素敵な活動になることを祈っています」というように、練習が一回の実践のためのものだけでなく、発展的な意味を持っていることを指摘していただいた。子供たちからの評価、チームワークの意味、子供たちと一緒に作っていく活動、というように様々な観点から「キッズ」の評価をして頂いた。

「今日の参観で、取り組みについて良くわかりました。今後外国語活動、英語活動担当として、乃木小にこの取り組みを広めることができるようにしていきたいです」と、小学校との連携における活動の可能性につながるコメントも頂いた。今後の授業内容に関しては、以下のコメントを大いに参考にしたい。「1つだけ気になるのは、対象とする子供たちのことです。学園祭の発表を見学した際、1才から10才くらいの幅広い年齢の子供たちが対象だった。それぞれが楽しく取り組んでいたのが、問題は無いかもしれません。しかし、例えば『幼保園のぎの年長さんに』というように相手をはっきりさせるとまた違った取り組みになるかも、という気がしました。」

「おはレス」での実践も、学園祭の企画と同様に、幅広い年齢層の子供たちが対象である。先にも述べたように、幅広い年齢層の不特定の人たちが、広く参加できる機会の提供、子供たちが英語に触れる機会の提供という点では地域貢献という役割を「キッズ」の実践は果たしている。しかし、「キッズ」をスタートさせた頃は、ゼミという形態だったため、学生数も10人程度であり、幼児・児童英語教育の方法や内容研究の要素がかなり大きな部分を占めていた。指摘にあったように、対象が決まれば教材の選択にも一貫性が生まれ、回数を重ねることができれば、さらに内容も深めることができ、英語学習の要素をもっと盛り込むことができると考える。本学の授業として「キッズ」を展開する時、主に受講生数の関係で、実践活動の場を狭めてきた。今後は、英

語に触れ楽しむ機会の提供に止まらず、英語教育の一端を担える側面を備えた「キッズ」授業の展開を考えていきたい。

4. まとめ

本学での「キッズ・イングリッシュ」も、平成26年度で13年目となった。対象とする受講生や名称などは少しずつ変わったが、資料、教材、学生制作の手作り教材、実践の記録など、多くのものが蓄積されてきた。毎年それらを有効に活用しながら、新たな試みも取り入れている。「教えることを通して学ぶ」実践を経験しながら、学生たちは多くのことを学んできた。そして、今回のアンケート調査や授業公開などを通して、「キッズ」のあり方、今後について様々な問題や可能性も見えてきた。

日本の英語教育⁵⁾での利用を目的に構築された、CEFR-Jという「欧州共通言語参照枠(CEFR)」をベースにした新しい英語能力の到達度指標がある。言葉を使って何ができるかを、CAN DO という能力記述で表している。このような指標を用いて、「キッズ」の教材研究、教材選択をする方向も導入し、「幼児・児童対象の英語教育」という側面を明確にすることで、学生の学びの幅を広げることができるだろう。CEFR-Jの指標は、学生自身の英語能力、到達度を測るために用いることもできる。今後の実践では、「対象者」を限定し、学生が「教える立場」を意識して取り組める機会も取り入れていきたい。

注

1) 平成26年度 'English Story Time'の参加人数

平成24年	子ども	大人
6/15(日)	24	20
6/22(日)①	25	13
6/22(日)②	24	18
6/29(日)①	15	10
6/29(日)②	13	10
7/5(土)①	4	3
7/5(土)②	4	3
7/13(日)①	11	8

7/13 (日) ②	20	12
7/20 (日) ①	12	6
7/20 (日) ②	7	5
7/27 (日) ①	11	9
7/27 (日) ②	10	5
8/ 2 (土) ①	7	4
8/ 2 (土) ②	10	6
8/ 3 (日) ①	16	11
8/ 3 (日) ②	19	18
8/ 7 (木)	15	12
10/19 (日) ①	8	9
10/19 (日) ②	8	10

2) 今年度事前準備段階で受講生全員が取り組んだメニュー

歌：Hokey Pokey、The Itsy Bitsy Spider、Head, Shoulders, Knees and Toes、Old MacDonald Had a Farm、Rock, Paper, Scissors、Hello Song、Bingo、If You're Happy and You Know It
 絵 本：Goodnight Moon、From Head to Toe、The Very Hungry Caterpillar、Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?、Today is Monday、Spot Can Count、Where's Spot?、Where's the Fish?、Peek-a-Boo

かみしばい：Snow White、Little Red Riding Hood、Momotaro、The Mouse's Wedding、The Three Little Pigs、The Rabbit of Inaba、The Legend of Yamata no Orochi

3) 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（登録 平成26年10月）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

4) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について、文部科学省では、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」を平成25年12月13日に公表した。

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1343704.htm

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」pdfファイル

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf

5) 現在、日本の外国語（英語）教育が様々なレベルで新たな局面を迎えている。小学校での外国語活動に関しては、小学校と中学校との連携、中学校や高校での授業のあり方なども含め、上述したように文科省は新たな試みを促す提言を発表している。注3の文科省『今後の英語教育の改善・充実方策について』では、これからの日本社会について次のように述べられている。2020年の東京オリンピックの先、2050年頃には「我が国は、多文化・多言語・多民族の人たちが、強調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民の一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。母語教育に加え、外国語教育の重要性が一層高まるのである。」グローバル化が最終段階に達した世界を見据え、日本人の外国語運用能力に対して、そして世界経済の中での日本人の位置に対して、危機感を感じている文言であることは明らかである。小学校での外国語教育も、遅々として進んでいないように思う。2014年のノーベル物理学賞を受賞した中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授の新聞インタビューでの言葉が印象深い。「ほかに日本へのメッセージはありますか。」の問いに対し次のように述べている。「日本はグローバリゼーションで失敗していますね。携帯電話も日本国内でガラパゴス化している。太陽電池も国内だけです。言葉の問題が大きい。第1言語を英語、第2言語を日本語にするぐらいの大改革をやらないといけない。（朝日新聞、2014年10月18日、朝刊）」

（受稿 平成26年12月8日、受理 平成26年12月15日）

